

東北水産研究レター No.27 (2013. 03)

調査船「若鷹丸」：被災海域での調査を継続

独立行政法人水産総合研究センター所属の調査船「若鷹丸」は、仙台湾から三陸沖まで幅広い海域において水産資源や海洋環境等の調査航海を実施してきました。震災後もこれら調査を継続していますが、これまでも様々な難局に遭遇しました。

津波による陸上からの流出物は、今でも海底に堆積しています。こうした瓦礫は大小様々で、着底トロール調査における曳網を行う際には、魚群探知機による海底探査を行い（図1）、海底への瓦礫堆積状況を予め把握する必要があります。

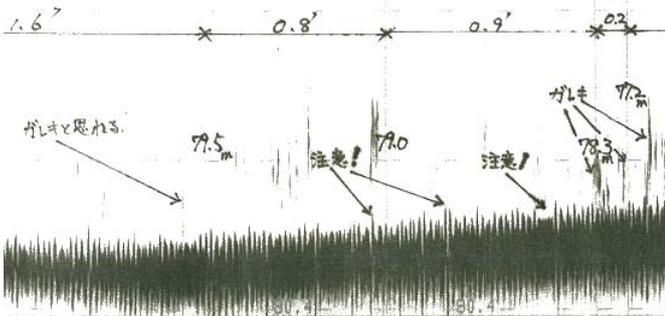


図1 魚群探知機による瓦礫映像

今年度は、道南から茨城県沖までの34～900m水深帯で187回の着底トロール調査を実施しました。また、浅水深海域では調査を安全に行うため、広帯域計量魚群探知機を併用し（図2）、海底の状況を出来るだけ正確に把握し曳網しました。

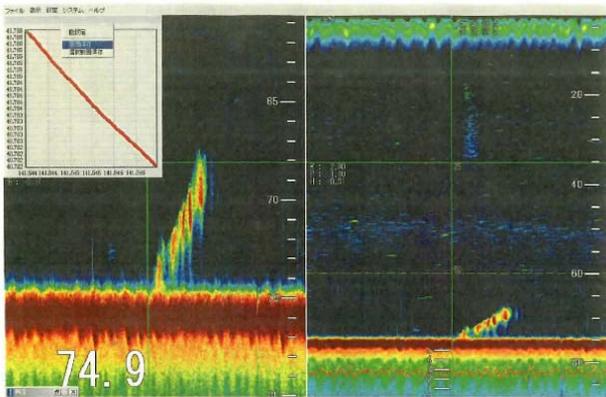


図2 広帯域計量魚群探知機によるエコーグラム
画面右が全体像、画面左が水深20～60mの拡大像
色が赤いほど反射が強いことを表す

今年度の瓦礫入網は、昨年度と比較して減少したものの、海中に散乱した布団の綿が網目に絡み（写真）、トロール網の採集効率に影響を及ぼしました。網に絡んだ布団綿は海水で洗い流すことが難しく、手作業で取り除きました。

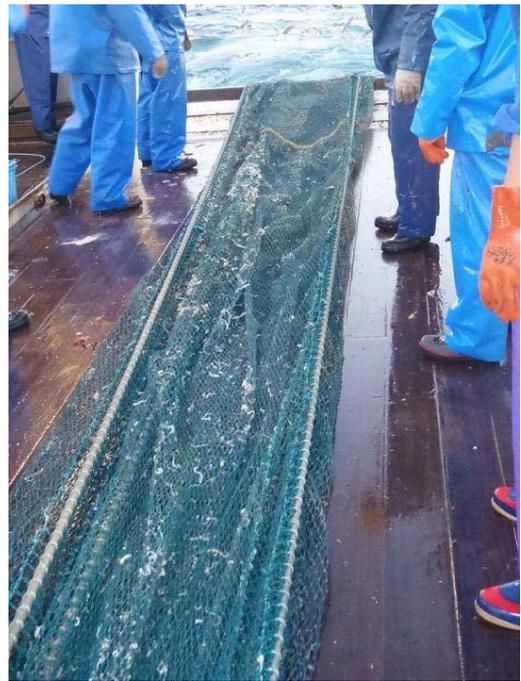


写真 布団綿が絡んだトロール網

今後も被災地沖合の調査海域では、こうした瓦礫等の影響を受けるとは思いますが、細心の注意を払い調査航海を遂行して参りたいと考えております。

(若鷹丸船長 村塚正信)



調査航海時の集合写真
紺色の作業着を着用しているのが村塚船長（写真中央）

コンテンツ

- ①調査船「若鷹丸」：被災海域での調査を継続
- ②無人航行海洋測器：水中グライダーによる海洋観測